1 急かされると心がこわばる

急かせる言葉は心に届かない

「ほらほら、またこぼしちゃった。何度言ったらわかるのよ。早くふきん！　裕一ッ！　あなたが取ってくるのよ」

母親がすっかりあわてていらだっているのに、当の裕一君は、動かないどころか、今思いついた妹へのいやがらせをつづけていて、やめようとしません。ほら、またしても。

「いやッ。痛いッたら」

「へへ、へへへ」

しかたなくお母さんは、取ってきたふきんでテーブルじゅうにこぼれて広がっているミルクをふく。その間も、裕一君は妹へのいやがらせをやめません。

「あっ、そうする気？　じゃあ、これだったら？　フフフ、へへへ」

母親のいらだちはまったく無視。

「もうッ。やめてッ」

悲鳴のついでに、

「ねえ、お母さん」

と助けを呼ぶ妹の春香ちゃん。

自分がこぼしたミルクの始末も忘れて、春香ちゃんの見ている少女雑誌を取り上げ、でれでれとからかいつづけている裕一君。お母さんは、つき出したお尻をピシャリと叩いて、

「いい加減にしなさい！」

一オクターブ上ずったわめき声にも、裕一君はいっこうに動じない。これもいつもどおり。

「こういうところに置いたら倒すよって、注意したでしょう。ねえ、わかってるの？　聞きなさいよ」

お母さんのいらだちと裕一君の関心。この二つの心の向きは、まるで無関係のようです。そして、お母さんに助けを求める妹の心の向きも。それぞれがバラバラ。

家の者同士だと、親も子もお互いに言いたい放題、したい放題。それがてんでんばらば